

まえがき

英語と日本語を対照させた英語学の概説書として、くろしお出版から西光義弘（編）『日英語対照による英語学概論』が刊行されたのは、1997年2月のことであった（以下、「前書」と言う）。前書は、幸いなことに多くの方々に好意的に受け入れていただき、15年以上を経た今も版を重ね、英語学（あるいは言語学）の教科書として広く利用されている。

しかし、大学での授業が急速にセメスター制に移行しつつある現状において、400頁に及ぶ前書は、1セメスターではとてもこなし切れない分量である。また、執筆者が（今よりは）若かったこともあり、意気込んで書いている分、内容が多少難しいと思われる個所もかなりあった。そこで、受講生による自学自習なども取り入れれば、1セメスターで終われる量にすること、そして、初学者でも理解できるような平易な内容にすることの2点を目的として新たに本書を編むことになった。

前書の執筆者のうち、4名が引き続き本書の各章を担当し、新たに3名の執筆者を加え本書の布陣となった。内容は、基本的には前書を踏襲しているが、昨今の学会の動静に合わせ、意味論を認知意味論に特化させたこと、そして、新たに語彙意味論の章を設けたことが前書とは異なる。また、分量の関係で、前書にあった英語史（及び補説の日本語史）は割愛せざるを得なかった。各執筆者の原稿は編者（三原・高見）で詳細に読み、より分かり易くするために、コメントを付けていったん執筆者に戻す方針を取った。また、くろしお出版の池上達昭氏と荻原典子氏には、多忙な業務の中、読者目線で（特に学生目線で）難しいと思われる個所を指摘していただいた。その結果、初学者にも分かり易くという当初の目的はかなり達成されたものと思われる。

本書は前書の姉妹編であり、見え隠れしつつ、前書の「精神」を受け継いでいる。前書の「まえがき」で、西光義弘氏が関西言語学会や旧大阪外国語大学のことを引き合いに出し、なぜ日英対照かというこ

とを書いておられる。本書の「まえがき」は、セピア色の思い出を述べるべき場所ではないが、英語と、言語直感を働かせることができる日本語とを対照させ、ことばに関して「なんでやる？」と素朴に議論を戦わせるのがかつての関西の言語学の土壌であったことは、前書の編集をされた西光氏への感謝の念を込めて、やはり記しておきたい。そして、必要に合わせて、前書と使い分けていただければと思う。

[学生の方々へ]

みなさんは、「英語学」と聞くと、これまで勉強している「英語」と何が違うのだらうと思うことでしょうか。「英語学」というのは、英語という言葉がどのような仕組みになっているかを考える言語学の一領域です。つまり、英語の音や単語、文や会話などがどのような仕組みになっており、そこにどのような規則が潜んでいるかを明らかにしようとする研究分野です。本書は特に、そのような英語の仕組みを日本語の仕組みと比較しながら説明します。きっとみなさんは、本書を通して英語や日本語が、理路整然とした体系を成し、興味深い規則に支えられていることを知り、言葉の面白さに驚くことでしょうか。

どうして赤ちゃんは、that を dat と言ったり、「父さん」を「とうたん」と言ったりするのでしょうか。sugar maple(サトウカエデ)と maple sugar(カエデ糖)、「ミツバチ」と「ハチミツ」は、まったく意味が違いますが、単語を入れ替えただけでどうしてこのような違いが生じるのでしょうか。「太郎が好きな花子」は、どちらがどちらを好きなのでしょう。It is hot. と言え、It is not cold. ということになります。It is not hot. と言っても、It is cold. ということにはなりません。なぜでしょう。*Hamlet* を読んでいるのに、どうして I'm reading Shakespeare. と言えるのでしょうか。人はみんな平熱があるのに、どうして「私は今日熱がある」というふうに言うのでしょうか。このような疑問を解決し、英語と日本語のメカニズムについて本書で学んでもらえれば幸いです。

2013年初夏 編者

目次

まえがき i

第1章 音韻論	001
1. 母音と母音体系	002
[1.1] 母音体系	002
[1.2] 音の有標性	005
[1.3] 二重母音と母音融合	006
設問1	007
2. 子音と子音体系	007
[2.1] 子音体系	007
[2.2] 子音の有標性	009
設問2	010
3. 形態音素交替	010
4. 音節とモーラ	011
[4.1] 音節と音節構造	011
[4.2] モーラ	014
[4.3] 音節言語とモーラ言語	016
設問3	017
5. アクセント	017
[5.1] 高低アクセントと強弱アクセント	017
[5.2] アクセントの機能	020
[5.3] アクセント規則	021
[5.4] 複合語アクセント規則	022
設問4	023
6. 文アクセントとイントネーション	023
[6.1] 文アクセント	023
[6.2] イントネーション	024
設問5	026

7. リズム	026
設問 6	028
Further Reading	029
第 2 章 形態論	031
1. 形態論とは	032
[1.1] 形態論の研究内容	032
[1.2] 屈折形態論と派生形態論	032
[1.3] 単語の構造	033
設問 1	036
2. 派生形態論の主な仕組み	036
[2.1] 派生	036
[2.2] 複合	039
設問 2	041
3. 派生形態論のその他の仕組み	041
[3.1] 品詞転換	042
[3.2] 語形短縮	043
[3.3] 混成	044
[3.4] 頭文字語	045
[3.5] 逆形成	046
設問 3	047
4. 派生と複合に課される一般的な条件	047
[4.1] 単語の主要部	048
[4.2] 右側主要部の規則	050
[4.3] 「意味的な主要部」という観点から見た右側主要部の規則	051
設問 4	056
5. 複合名詞の意味について	056
[5.1] 上位語と下位語の関係	056
[5.2] 複合名詞の主要部における意味の稀薄化	057
設問 5	059
Further Reading	059

第3章 統語論 生成文法 061

1. 句構造	062
[1.1] ことばの構造	062
設問 1	063
[1.2] 日英語の語順	063
[1.3] 主要部	064
[1.4] 文の構造	066
設問 2	068
[1.5] c 統御	069
設問 3	069
[1.6] 代名詞の解釈	070
[1.7] 作用域	071
設問 4	072
2. 名詞句	072
[2.1] 格	072
[2.2] 脱落形	073
[2.3] 格付与	074
[2.4] 意味役割	075
設問 5	076
設問 6	076
[2.5] 音形を持たない名詞句	077
3. 移動	078
[3.1] 文法の枠組み	078
[3.2] 受動文	079
設問 7	080
[3.3] 上昇構文	080
[3.4] WH 移動	081
設問 8	084
[3.5] かき混ぜ操作	084
4. 生成文法の企て	085
Further Reading	087

第4章 統語論 機能的構文論 089

1. はじめに	090
2. 文の情報構造	090
[2.1] 新情報と旧情報	090
設問1	093
設問2	094
[2.2] 省略	094
設問3	097
[2.3] 日英語の基本語順と移動	097
設問4	102
[2.4] 「ハ」と「ガ」の機能	102
設問5	103
3. 視点	103
[3.1] 話し手の視点と相互動詞	103
設問6	106
[3.2] 話し手の視点の一貫性	106
設問7	110
[3.3] 受身文	111
設問8	113
[3.4] 対称詞（人の呼び名、呼称詞）の視点階層	113
設問9	115
設問10	115
Further Reading	116

第5章 語彙意味論 117

1. 語の意味	118
設問1	119
2. 意味関係	120
[2.1] 上下関係	120
設問2	122
[2.2] 部分・全体関係	122

[2.3] 反意関係	122
設問3	125
[2.4] 同義関係	125
3. 多義	126
[3.1] 同音異義と多義	126
[3.2] 意味の自律性	128
設問4	129
4. 名詞の意味：可算と不可算	129
設問5	135
5. 動詞の意味	135
[5.1] 意味役割	135
設問6	138
[5.2] 語彙概念構造	139
設問7	141
[5.3] アスペクト	141
Further Reading	144
第6章 認知意味論	147
1. 認知言語学	148
2. カテゴリー化とプロトタイプ	150
設問1	155
設問2	155
設問3	155
3. メトニミー	155
設問4	158
4. 語の意味	158
[4.1] プロファイルとベース	158
[4.2] ICM	159
設問5	160
設問6	160
設問7	161

5. 抽象概念とメタファー	161
[5.1] 抽象概念の多面性とメタファー	164
[5.2] 多義性とメタファー	164
[5.3] 推論とメタファー	166
[5.4] イディオムとメタファー	167
[5.5] 構文とメタファー	168
[5.6] 経験的基盤とメタファー	169
設問 8	170
設問 9	170
6. 事態の解釈	170
設問 10	172
設問 11	172
7. 概念融合	172
設問 12	174
Further Reading	175

第 7 章 語用論 177

1. 語用論という領域	178
[1.1] 文と発話	179
[1.2] 語用論のアプローチ	180
[1.3] 認知語用論 (関連性理論)	180
2. 発話の論理形式	182
3. 表意	183
[3.1] 曖昧性除去	183
設問 1	184
[3.2] 飽和	184
設問 2	184
[3.3] 自由拡充	185
設問 3	186
[3.4] アドホック概念形成	186
[3.5] 基本表意と高次表意	187

設問 4	188
[3.6] 文副詞と高次表意	188
設問 5	189
4. 推意	189
[4.1] 前提推意と帰結推意	189
設問 6	190
[4.2] 強い推意と弱い推意	190
5. 概念的情報を持つ表現	191
6. 手続き的情報を持つ表現	192
[6.1] but の手続き的情報 (語句)	192
設問 7	194
[6.2] any や ever の手続き的情報 (表現グループ)	195
[6.3] 疑問文の手続き的情報 (文形式)	196
7. 記述的使用と帰属的使用	197
[7.1] リポートとエコー的使用	198
設問 8	199
[7.2] アイロニー	199
8. 日英比較	201
[8.1] ッテやノダと「内緒の話だが」	201
設問 9	203
[8.2] not と～ (ノデハ) ナイ	203
Further Reading	205
索引	207
執筆者紹介	212

第 1 章

音韻論

窪園晴夫

1. 母音と母音体系

[1.1] 母音体系

人間の言語に**母音** (vowel) と**子音** (consonant) の2種類の音があることはよく知られている。母音とは [a, i, u, e, o] などの音で、一方、子音は [k, s, m] などの音を指す。**五十音図** (図1) では縦軸に母音、横軸に子音が並べてあり、子音と母音が一緒になって音節やモーラというまとまり(4節)を作る。日本語のかな文字はおおむね、このまとまりに対応する。

	w	r	y	m	h	n	t	s	k		子音 母音
ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	a
	ー	り	ー	み	ひ	に	ち	し	き	い	i
	ー	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	u
	ー	れ	ー	め	へ	ね	て	せ	け	え	e
	ー	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	o

図1 五十音図

母音の記述には図2のような**母音空間**がよく用いられる。これは図3の**発音器官** (organ of speech) における、舌の前後位置と舌の高さ(口の開き具合)を示したもので、例えば [i] という母音は舌の前の部分が高く盛り上がることによって作り出され、一方 [u] という母音は舌の後ろの方が高くなることによって作り出される。[a] の発音では口が大きく開き、舌全体が低くなる。母音は一般に次の3つの基準を用いて記述される。

- (1) a. 舌の位置 (前舌、後舌)
- b. 舌の高さ (高舌、低舌)
- c. 唇の丸み (円唇、平唇)

第 2 章

形態論

竝木崇康

1. 形態論とは

[1.1] 形態論の研究内容

言語学における**形態論** (morphology) の研究内容はどのようなものであろうか。大雑把に言えば、文を作る基本単位である単語とはどのような要素がどのように並べられて作られているのか、単語はどのような構造を持っているのか、単語はどのような規則や原則に基づいて作られるのかというようなことを、形態論は解明しようとする。

例えば expected (期待された、予想された) という単語は expect という動詞とその後に続く -ed という要素からできているし、unexpected (期待されていない、予想されなかった) という単語は、さらにその前に付く un- という要素からもできている。このように、単語はどのような要素がどのような規則性に基づいてどのように構成されているかを、形態論は明らかにしようとする。また形態論は、人間の持つ言語能力を単語を形成し理解する能力という観点から探ることもする。

[1.2] 屈折形態論と派生形態論

厳密に言うと、形態論は**屈折形態論** (inflectional morphology) と**派生形態論** (derivational morphology) の2つに分かれる。屈折形態論は、ある単語のある文脈における語形変化の仕組みを扱うもので、名詞ならば単数形・複数形・所有格形などに分けられ、動詞ならば原形・三人称単数現在形・過去形・現在分詞形・過去分詞形などに分けられ、形容詞ならば原級・比較級・最上級を表すそれぞれの語形などに分けられる。つまり屈折形態論で扱われるのは、1つの単語が文脈においてどのような語形の変化を示すかであり、たとえ形が変化しても同じ1つの単語であることには変わりがない (例えば、book-books, walk-walks-walked-walking-walked, kind-kinder-kindest を見てほしい)。

一方、派生形態論は、ある1つの単語に他の要素を付加するなどして別の単語を作る仕組みを扱い、**語形成** (word formation) とも呼ばれ

第 3 章

統語論 生成文法

三原健一

1. 句構造

[1.1] ことばの構造

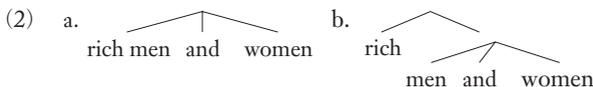
世界の言語は約 6000 あると言われている。それぞれの言語は、文字や単語の違いを初めとして、文法的にも様々で、共通する部分はあまりないように思えるかもしれない。語順についても、英語が SVO（主語—動詞—目的語）であるのに対して、日本語は SOV 語順である。しかし、英語や日本語の話者は、アラビア語が VSO 語順を取ると知ったとき、世界にはそんな言語もあるのかと驚くに違いない。人間は、自分とは違うものに遭遇したとき、まず違う点に気を取られがちである。ことばの場合もそうだろう。が、英語も日本語もアラビア語も人間のことばなのであるから、冷静に考えれば、共通する部分があるはずだと考える方がむしろ自然であろう。

この章では、英語と日本語に関して、統語論における振る舞いを中心に見る。統語論 (syntax) とは、語と語の結びつきにおける規則性を、文の統語構造 (syntactic structure) の観点から明らかにしようとする言語学の一分野である。生成文法 (Generative Grammar) における統語論は特に、英語や日本語などという個別言語の違いを超えて、多くの言語に共通する点を捉えようとする方向性を持っている。もちろん、英語と日本語（とアラビア語など）は系統が異なる言語なので相違点も多いが、異なる点をただ異なるとするのではなく、その奥に潜む原則を発見し、その原則が規則的な違いとして現れると考えるのである。

では、統語構造とは何なのだろうか。(1) の例を考えてみよう。

(1) rich men and women

(1) には二通りの意味がある。1つは、金持ちなのは男性だけという意味で、もう1つは、男性も女性も金持ちだという意味である。この意味の違いは、次のように構造化してみると、視覚的にもよく分かる。



(2a) では、rich men と women が and を介して結びついているのに対して、(2b) では、men と women がまず結びつき、そのまとまりを rich が上から修飾している。休止 (|| で示す) を置いて読めば、それぞれ、rich men || and women, rich || men and women のようになろう。

本章で言う統語構造とは、(2a) の rich men と and と women のように語順に沿って要素をヨコに区切る構造と、(2b) の rich と men and women のように要素をタテに区切る構造の総体を指す。(2a, b) は、言語にはヨコの構造 (線状的構造) とタテの構造 (階層的構造) があることを示している。

設問 1

ひとまとまりになる要素の、結びつき方の違いによって意味が異なってくる場合もある。

(a) Flying planes can be dangerous.

(a) は、Flying と planes の結びつき方によって2つの意味があるが、この2つの意味がどのようなものか考え、そして、それぞれどのような結びつき方なのか考えてみよう。

[1.2] 日英語の語順

英語が SVO (主語—動詞—目的語) の語順を取るのに対し、日本語が SOV 語順となることを、もう少し深く考えてみよう。

(3a, b) の述部「ate bananas/ バナナを食べた」で中心的な機能を果たしているのは動詞であると考えられる。

(3) a. John ate bananas. b. 太郎がバナナを食べた。

つまり、述部の「まとまり」において、中心として働く動詞が、(4a, b) のように日英語で逆の位置に来るということである。

(4) a. ate bananas b. バナナを食べた

このように、ある「まとまり」において中心となる語がどこに来るかという点から考えてみると、日英語がきれいに逆になっていることが分かってくる。

第 4 章

統語論 機能的構文論

高見健一

1. はじめに

私たちは普段、次の (a) のような文をよく使うが、その一部を例えば (b) のように変えると、それが不自然で容認できない文だとすぐに気がつく (そのような文を「不適格文」と呼び、*で示す)。

- (1) a. あれ、変な音が聞こえてきたぞ！
 b. *あれ、変な音は聞こえてきたぞ！
- (2) a. ハワイに行ったことがありますか？何回か。
 b. *ハワイに行ったことがありますか？何回。
- (3) a. 山田君が僕にこの本をくれたよ。
 b. *山田君が僕にこの本をやったよ。

(1) – (3) の (a) と (b) は、一体何が違っており、どうして (a) は適格なのに、(b) は不適格なのだろうか。本章ではこのような違いを、文の構造だけでなく、その意味や働き、話し手の立場、聞き手が知っている情報と知らない情報というような観点から構文分析を行う「**機能的構文論**」(Functional Syntax) という文法理論に基づいて説明する。そして、英語でも同様の適格文や不適格文を観察し、英語と日本語の共通点や相違点を探るとともに、その背後にどのような規則があるのかを明らかにしたい ((1) – (3) は、それぞれ 2.4 節、2.3 節、3 節を参照)。

2. 文の情報構造

[2.1] 新情報と旧情報

まず、次の 2 つの応答を考えてみよう。

- (4) A: What did John do?
 B: He broke the vase.
 旧情報 新情報
 重要度がより低い 重要度がより高い

第 5 章

語彙意味論

小野尚之

1. 語の意味

この章で取り上げる**語彙意味論** (Lexical Semantics) は、語 (単語) の意味とは何か、語の意味は別の語の意味とどのように関係するか、語の意味は形態や統語にどのように関わるかなどを考える言語研究の一分野である。語の意味を明らかにすることは一般的な辞書においても行われていることである。しかし、辞書の記述とは異なり、語彙意味論では個々の語の意味を正確に定義することよりも、一般性の高い原理や法則といったものから意味に関わる様々な現象を説明することに重点が置かれる。そのため、個々の語の意味を基本的な構成要素に分解して分析することがしばしば行われる。これを**語彙分解** (lexical decomposition) といい、意味を構成する要素は**意味成分** (semantic features) と呼ばれる。

では、まず初めに語彙分解の例を具体的に見てみよう。例えば、man, woman, boy, girl はそれぞれ「人」を表す点では同じであるが「性別」、あるいは「大人か子供か」という点で異なっている。そこで、これらを3つの意味成分 [±HUMAN] [±MALE] [±ADULT] として想定する。±の意味は、+であればその成分を持ち、-であればその成分を持たないか、反対の値を持つということである。すなわち、[-MALE] はその反対の値、つまり [+FEMALE] と同じと考えてよい。これによって、man, woman, boy, girl はそれぞれ次のような意味成分に分解することができる。

(1)		HUMAN	MALE	ADULT
a.	man :	+	+	+
b.	woman :	+	-	+
c.	boy :	+	+	-
d.	girl :	+	-	-

こうすることによって、語ごとに意味を定義するのではなく、様々な語に共通する基本要素に還元して意味を記述することが可能になる。

第 6 章

認知意味論

杉本孝司

1. 認知言語学

認知意味論(Cognitive Semantics)とは認知言語学(Cognitive Linguistics)における意味論(semantics)のことを言う。この章は英語や日本語の意味現象を中心に認知意味論の考え方に親しむことをねらいとしている。本章で言う**認知**(cognition)とは次のことを指す。

- (1) 人や動物が何らかの対象についての知識を得ること；その知識は単に五感によるもののみならず、運動感覚、平衡感覚、身体内部からもたらされる情報(心臓の動悸、頭痛、目まい、その他)などおよそ知覚の対象となるものすべてに関する情報に関わること。またこれらの情報に加えて、学習、記憶、推論、判断などの機能も含み、外界の情報を収集・処理・概念化する過程も含む。

つまり認知とは身体と精神の両方に深く関わる情報とその処理や蓄積過程のことだと理解できる。このことが意味論にとって何を意味するかは以下を読み進めていく過程で徐々に明らかになると思う。具体的な言語例を扱う前に、この認知ということに関して人間と他の生物とを比較しながら「意味を理解する」ということについて少し考えてみよう。

人間は何かの存在やその距離情報を直接的に得る場合、聴覚や触覚による場合もあるが、普通は視覚情報を用いる。例えば遠くに立つ1本の木や近くにある1つのベンチなど、見ればすぐにその存在やおよその距離が理解できる。逆に言えば見えないものの存在や距離は分からない。人間はそういう形で自分たちにとって意味のある物体の存在や位置情報を手早く得ることができる。しかしイルカやコウモリはこのような視覚に頼る方法ではなく反響定位という方法を用いる。自らが発した音がエコーバックされて両耳に到達する強さや時間差などを利用して、他の生物の存在を確認し、その大きさや距離、さらには種類までも同定できるという。こうして「見る」ことがイルカやコウモリにとって意味のある情報となっている。

第7章

語用論

吉村あき子

1. 語用論という領域

私たちが日常のコミュニケーションで伝達する意味は、ことばの中にあるようでいて、ことばの中にあることが多い。筆者が、教室で授業を始める前に受講者名簿にメモしようとして、ペンを忘れたことに気づき、前の席に座っている学生に、(1)「鉛筆、持ってますか?」と言うと、その学生は筆箱から鉛筆(またはシャーペン)を出して貸してくれる。字義通りには、鉛筆を持っているかいないかを尋ねる発話なので、ただ「はい、持っています」と答えるだけでもいいはずなのだが、筆者が尋ねた学生は皆、鉛筆を貸してくれた。このとき、「鉛筆、持ってますか?」という疑問文発話は、「鉛筆を貸してませんか」という依頼(含意)を伝達し、聞き手もそう理解する。(2)では、話し手は(字義通りの)「いい天気だ」とは思っていないし、そう伝えようともしていないが、これまでの経緯を知っている聞き手Aは、(2)をちゃんとアイロニー(皮肉)として理解する。

- (1) [授業を始めようとして、教員が前の席に座っている学生に]
鉛筆、持ってますか?
- (2) [「明日はピクニック日和のいい天気よ」と言う友人Aのことばを信じて出かけたピクニック先で大雨に見舞われ、Aに向かって]
本当に今日はいい天気ね。
- (3) 彼は、そのとき、これをポケットに隠し持っていたのだ。

一方(3)は、単語の意味だけでは、その発話自体が何を言っているのか分からない。「彼」や「そのとき」「これ」が何を指すかを決められる具体的な文脈があって初めて(例えば「そのマジシャンは、トランプのカードを広げるとき、このハートのエースをポケットに隠し持っていたのだ」とか、別の文脈では「犯人は、会場に到着したとき、このナイフをポケットに隠し持っていたのだ」など)、発話の明確な意味が理解できる。

以上のような、コミュニケーションに普通に現れる何気ない発話を観察して分かってくるのは、「話し手の意味(speaker's meaning)は、こ